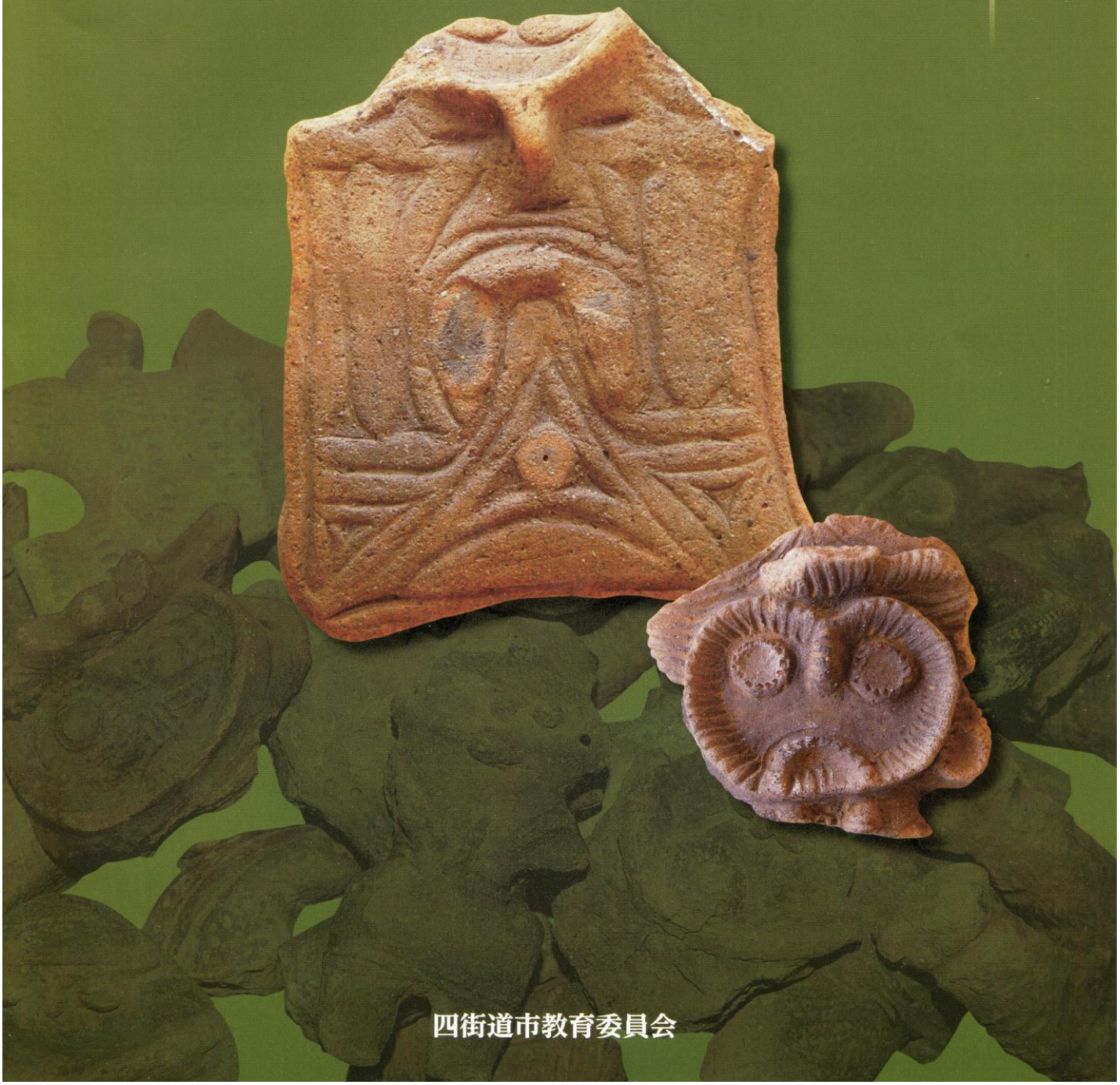
【四街道市の文化財】普及版 No.5

八木原貝塚と縄文社会



四街道市教育委員会

八木原貝塚と縄文社会

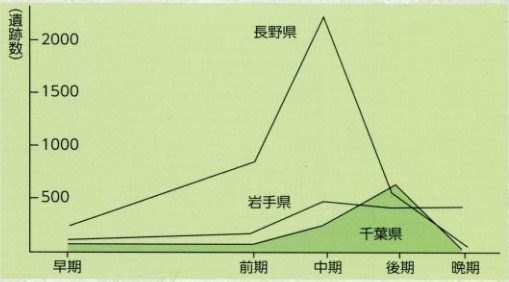


図2　時期別の遺跡増減

1.縄文社会の成り立ち

縄文文化は、今から約10,000年前におとずれた気候温暖化とともに成立した狩猟採集文化です。気候の温暖化は北極や南極の氷を溶かし、さらに海水の膨張によって海水面が上昇しました。東京湾や瀬戸内海などはこの頃に形成されたのです。

そして、一番気温の高い時期は今から6,500年ほど前の時期で、現在の利根川の下流域から霞ヶ浦や印旛沼、手賀沼まで海が入り組んだ時期でした（図1）。この頃は現在よりも平均気温が2℃ほど高く、暖かかったといわれています。

また、旧石器時代とよばれる狩猟を主な生活手段とした移動的な社会は、氷河期が終わりを告げて、暖かい海と森ができる中で次第に変化を遂げ、今から13,000年ほど前に人々は生活の手段を身につけていきました。それが定住とよばれる生活形態です。縄文時代は定住的な生活が広く開始され、日本の各地に豊かな地域性をもつ文化が展開しました。今日ではその総体を縄文文化とよんでいます。

縄文時代は、移動的な狩猟生活を主とした旧石器時代から稲作農耕社会である弥生時代をつなぐおよそ1万年間続いた狩猟採集文化です。そのため、縄文文化は長い時間の中で日本列島の内部で育まれ、豊かな個性をもっています。土器の製作や貝塚の形成など、縄文文化を特徴づける現象は、自然環境の変化が引き金となって、人類が身に付けた生活の知恵が生み出した産物です。

2.四街道の縄文時代

四街道市には現在までのところ、約110か所の縄文時代の遺跡が発見されていますが、縄文時代の後期から晩期になると、その数は極端に減少してしまいます。これは四街道市域だけに限らず、県内全体の広い地域にわたって認められる現象です（図2）。その原因は気候の寒冷化に伴う自然環境の悪化にあると考えられていました。しかし、縄文時代の人々は単に自然の恵みを受け取るだけではなく、資源を蓄えたり、様々な地域から物資を交換して入手したりして、隣り合う地域との結びつきを強めた地域社会を築いていました。遺跡数の減少は確かに目に見える大きな変化ですが、人口が減少したのか、こうした関係が築かれた社会そのものが崩壊してしまったのか、もう少し慎重に判断する必要があるでしょう。

なぜならば、千代田遺跡のように後期から晩期にかけて規模の大きな集落を形成していた遺跡があるからです。なお、遺跡数の減少は、実は縄文時代のなかで完結するような出来ごとではなく、稲作農耕社会である弥生時代の中期後半にまで継続して認められるのです。この数百年間におよぶ間の歴史は、実はまだよくわかっていません。

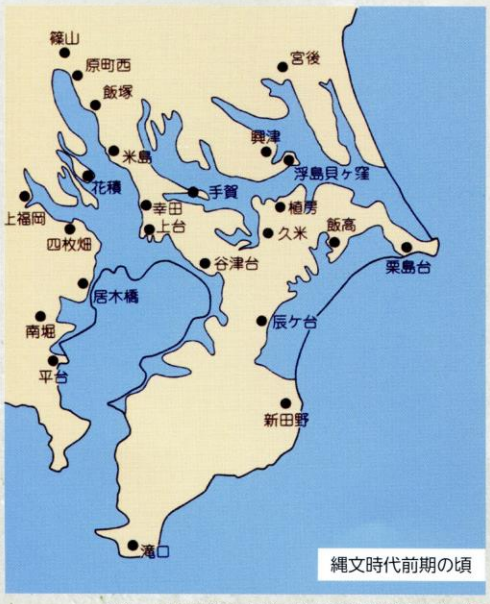


図1　貝塚からみた縄文時代の海岸線の変化（○は四街道市域）（「千葉県の歴史」資料編 考古Ⅰより）

千代田遺跡はどのように発見されたのか

― 千代田団地内に残された縄文のムラと貝塚の実像 ―

1.『日本貝塚地名表』の焙烙台遺跡

戦前・戦後をつうじて日本の貝塚の研究をすすめた研究者として酒詰仲男という考古学者がいました。酒詰氏は日本全国の貝塚を自分の足で歩いて、発掘や研究を進めましたが、その代表的な著作として『日本貝塚地名表』という本があります（写真1）。

写真1　『日本貝塚地名表』

その中に「物井焙烙台貝塚」という名称があり、この遺跡が八木原貝塚のある千代田遺跡のことを指すものと考えられます。焙烙とは豆などを煎るための素焼きの浅い鍋のことを指します。おそらく台地の中央部に浅い窪地が形成された地形を焙烙の形になぞらえたのか、または焙烙のような素焼きの土器の破片がたくさん散布していた畑地のことを指した名称なのでしょう。なお、酒詰氏の記述には、「この貝塚は昭和24年（1949）に坂詰秀一氏により教示されたもの」とされています。こうして遺跡の存在が報告されたにもかかわらず、その後、研究者たちが発掘を行うこともなく、再び畑と雑木林の中に埋もれたのです。

2.千代田団地の造成

昭和45年（1970）前後は、日本の各地でさかんに開発が行われた時期で、千葉県内でも大規模な開発が行われました。千代田遺跡もこうした大規模開発によって発掘が行われた遺跡の1つです。千代田遺跡Ⅳ区からは縄文時代中期後半から晩期前葉の時期の遺構や遺物が大量に発見され、当時の千葉県を代表する遺跡の1つとして注目されました。

3.千代田遺跡の発掘

焙烙台貝塚を含む一帯が新しい街づくりのために造成が始まることになり、この地域内の遺跡の所在が詳しく調べられました。その結果、この一帯には、縄文時代だけでなく、古墳時代の集落や古墳が存在していることがわかってきました。

そして、これらの遺跡を団地の造成工事が始まる前に発掘することになったのです。発掘の結果、古墳時代の住居跡が61軒、古墳が12基と焙烙台を中心とした場所からは縄文時代中期から晩期の土器や石器とともに様々な時期の生活の跡が姿を現しました。

その報告書は昭和47年（1972）に刊行されました（写真2）。焙烙台貝塚は、この発掘調査ではⅣ区と区割りをされた場所に相当します（図3）。そこは北側から進入した谷が東西に分岐してできた舌状の台地で、発掘前には谷が水田として利用され、その一部からはこんこんと湧水が湧き出してできた池がありました。こうした水が豊富な場所に縄文時代の人々は生活の場所を求めたのでしょう。

写真2　『千代田遺跡』四街道千代田遺跡調査会 1972

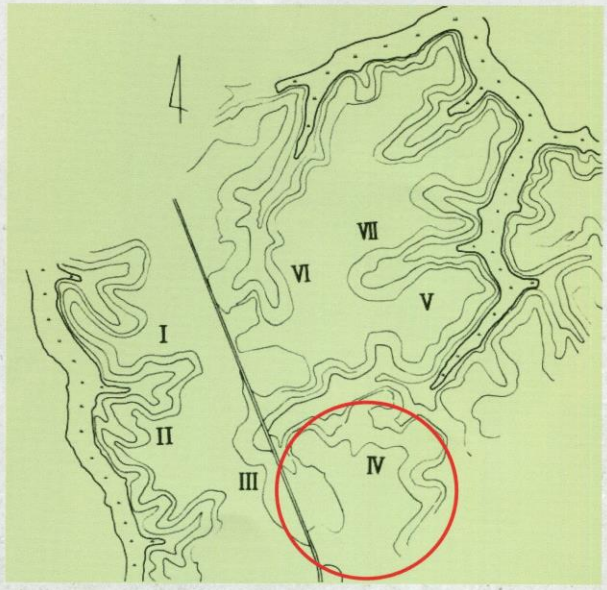


図3　千代田遺跡Ⅳ区（焙烙台貝塚）の位置

A　発掘前の千代田遺跡Ⅳ区の状況

B　縄文時代の竪穴住居

C　小竪穴の発掘状況

D　土器の出土状況

写真3　千代田遺跡Ⅳ区の発掘状況

4. 千代田遺跡Ⅳ区から発見された縄文のムラ跡

昭和46年（1971）から始められた発掘調査では、Ⅰ区で古墳時代の住居跡27軒、縄文時代住居跡1軒、Ⅱ区で縄文時代住居跡1軒、Ⅳ区で縄文時代住居跡9軒、小竪穴110基、貝塚1か所、溝状遺構3、Ⅴ区で縄文時代住居3軒、古墳時代住居34軒、方形遺構7基、土坑1基が発見されました。

この発掘によって、古くから焙烙台貝塚と呼ばれていた遺跡は、縄文時代後期から晩期の集落遺跡であることがわかってきたのです。

Ⅳ区を特徴づけるものの1つに塚状の高まりがあります。写真3-Aは、発掘がはじまる前のⅣ区の状況です。写真の右手が緩やかに高まりをもっている状況がわかります。遺跡がある台地上は平坦な地形ではなく、中央部に窪地が形成されていて、その周囲が高くなっていました。

発掘が始まる前までは、この高まりは古墳でないかと考えられていました。しかし、古墳であるならば高まりの内部には埋葬施設があるはずですが、発掘では全くそのような痕跡が認められず、大量の縄文時代の遺物が出土したのです。さらに高まりの下からは写真3-Cに見るような、大小110基の小竪穴が発見され、その内部や周囲からは3,500年前の土器や土偶が出土したのです。

このような高まりをもつ遺構は、近年では「盛土遺構」とも呼ばれるもので、高まりの中に縄文時代後期から晩期の住居跡や貝塚などの生活の跡が積み重なって発見されます。一見すると特異にも見えるこうした高まりを縄文人が祭祀のために作った特別な施設であると考える意見もありますが、これはまったくの誤りです。ちょうど、盛土遺構が出現する時期は遺跡数が極端に減少する時期に相当しており、長い時間同じ場所に住み続けるような暮らし向きが確立した時期と考えられます。

このように千代田遺跡Ⅳ区の発掘の成果には、今日の縄文時代研究につながる重要な発見があったのです。

A　大量に出土した土偶の破片

B　顔面の表現された土版

C　耳飾り表現のある土偶

D　大小の耳飾り

E　動物形土製品

写真4　出土した遺物

5.出土したさまざまなマツリの道具

千代田遺跡からは、発掘によって膨大な量の遺物が出土しました。その中でもⅣ区（焙烙台貝塚）からは、縄文時代後期から晩期の遺物が多く出土し、その内容も豊富なものでした。特に、注目されるものをいくつか紹介しましょう。

写真4-A、Cは土偶です。土偶は粘土で作られた女性像で、一見するとその顔はグロテスクにも見えますが、縄文時代の中でも地域や時期によって異なる特徴をもちます。写真4-Cはミミズク土偶とよばれるもので、頭の形が猛禽類のミミズクに似ていることからその名前がつけられました。この土偶の耳の部分にはリングのような表現が見られます。これは耳飾りを付けている状態を表現したもので、実際に千代田遺跡から大小のさまざまな形の土製耳飾りが出土しています。

耳飾りの大きさは、それを付ける人の年齢を表していると考えられます。土偶に表現された耳飾りは、おそらく成人した女性を表すものであったと考えることができます。また千代田近隣公園内の八木原貝塚からは、海の二枚貝に穴をあけて磨いて作られた貝製の腕輪（貝輪）も出土しています。これも女性が身につける縄文時代を代表する装飾品です。

千代田遺跡が残された縄文時代後期から晩期は、女性や男性を象徴化させた装身具の発達や、祭祀が盛んに行われた時代でもあります。おそらくこのような祭祀には、近隣の地域の人々が集まり、お互いの付き合いを深め合う機会ともなったのでしょう。こうして集落と集落、地域と地域、といった広い社会のつながりが形成されたと考えられます

この他に注目される遺物として、動物形土製品があります（写真4-E）。主に東日本の縄文時代後期から晩期にその類例が増加します。そのモデルの大半はイノシシやイヌですが、千代田遺跡から出土したものは、顔や鼻と耳の形が異なり、クマの可能性もあります。背中には体毛を表現したらしい沈線も描かれており、実物の特徴を良く表現したものです。